

「もう年だから…」とあきらめない！ ～これが阿賀野の進む道～



2025年2月4日

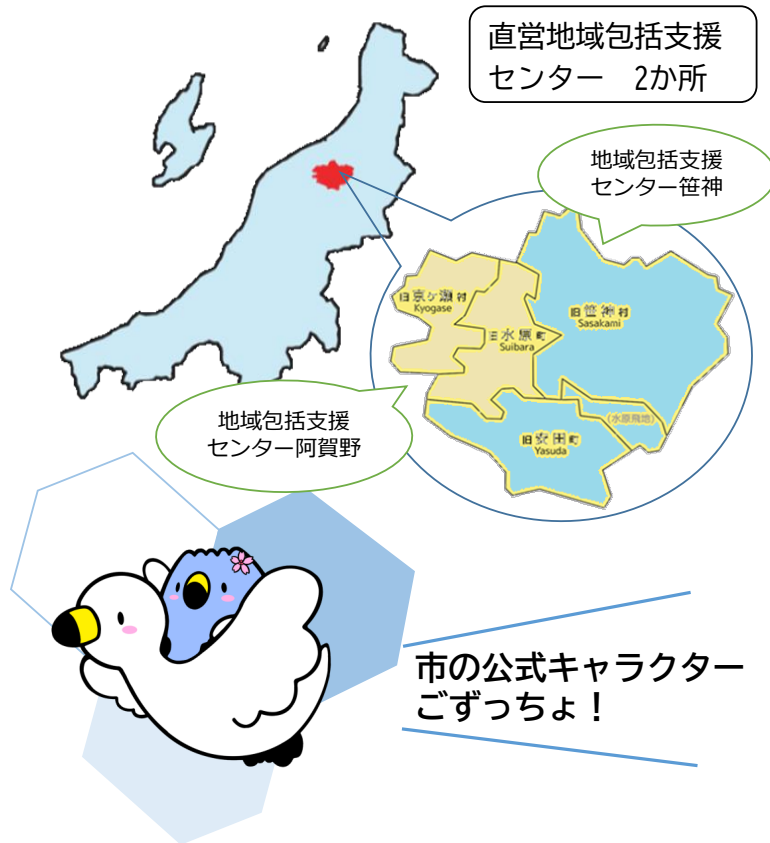
阿賀野市 橋本身江子

チーム阿賀野市



- | | |
|--------|---------------------------------|
| 橋本 身江子 | 地域包括支援センター笹神
センター長・保健師 |
| 小見 江梨子 | 課長補佐・保健師
生活支援コーディネーター（SC） |
| 井上 由美 | 課長補佐・事務 |
| 山崎 あい | 地域包括支援センター阿賀野
センター長・保健師・主任CM |
| 渡部 知彦 | 地域包括支援センター阿賀野
係長・理学療法士・主任CM |
| 清田 真里子 | 地域包括支援センター笹神
係長・社会福祉士 |
| 神田 渉 | 介護保険係係長・事務 |
| 関口 麻子 | 地域包括支援センター笹神
主幹・保健師・主任CM |
| 川口 裕里 | 地域包括支援センター阿賀野
主幹・保健師 |
| 根田 沙衣 | 地域包括支援センター阿賀野
主任・保健師・主任CM |

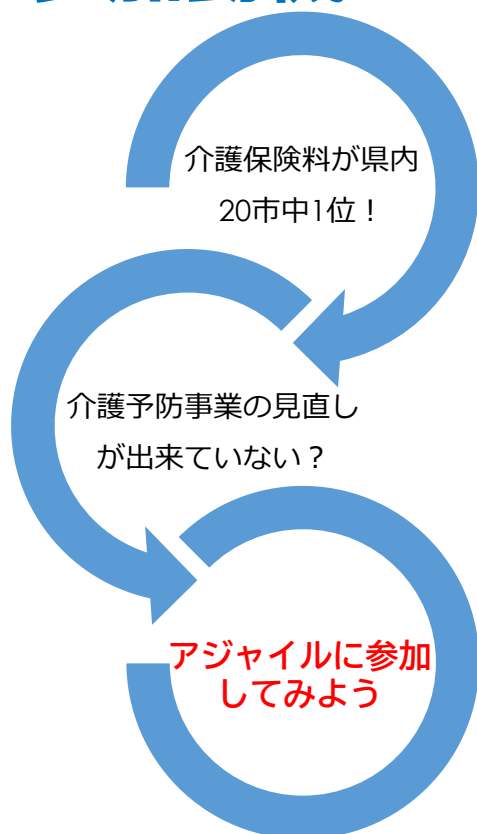
阿賀野市の概要



人口	39,584人 (R6. 3. 31現在)
高齢化率	35.5%
介護認定率	17.7%
介護保険料	6,921円/月 (県内20市中1位)
特徴	

- 平成16年に2町2村が合併。市の中心部以外は田園地帯で山々と一体化した素晴らしい景色が広がる。新潟市に隣接していることからベッドタウンとして若い世帯が多い地域もある。
- 白鳥飛来地として有名な“瓢湖 (ひょうこ)”があり、飛来の際には市内の所々に飛び交う白鳥の美しい姿がみられる。

参加動機



- 介護保険料は今後も上昇する見込みのため、上昇率の抑制が必要
- 元気な高齢者を増やしたり、支え合いのある地域づくりにこれまで以上に組み込まないといけないけど…どこからどうやって?

もやもや…



- そもそも今行っている介護予防事業と総合事業全体の評価、見直しができていない…ちゃんと効果があるのか?

- アジャイル相談会に参加し、「元気な人にお金を使っている」と指摘を受けて、ハッとした!
- 各事業の評価・再構築の考え方やスキルを得られるかも!
- とりあえずちょっとやってみよう!!! このプログラムに参加してみよう!!!



当初の問題意識は…

当初の
問題意識

○介護予防・日常生活支援総合事業の見直し
○自立支援の考え方の浸透

アジャイルで
取り組んだ
プロセス

本当にこれが市の問題なのか？

①現状を知る！

要支援認定の人の申請理由や原因疾患は？
要支援から非該当になった人はどんな人？サービスを卒業できた人は？
ケアマネの自立支援に対する意識はどうだろうか？…など薪を拾おう！

②ありたい姿を考える！

阿賀野市の高齢者がどんな姿になったらいいのか？

③真因を追求する！

ありたい姿だったらいいのに、今の現状になっているのはなぜ？

④課題を考える！

ありたい姿と現状のギャップはなに？これから取り組むべきことは？

⑤実行プランを考える！

これから、誰に、どんな働きかけをしていくか？

⑥初期アウトカムを
考える！

働きかけた相手が、どんな反応だったらいいか？望む変化は？

5

薪拾いをしてみたら…

介護保険の申請理由は？

「もう年だから…」
「風呂に入れなくなったから…」
「畑もできなくなったから…」
高齢者本人も家族もそう思っている

要支援認定者の
原因疾病割合は？

改善の可能性が高い、
虚弱、転倒骨折、関節
疾患の合計が約5割！

ケアマネの自立支援に
対する意識はどうだろうか？

自立に向けたケアプランを意識は
しているが、年齢によって卒業の
対象を考えたり、サービスを利用
することで現状維持できていると
思っている様子がある

要支援から非該当になった
人の状況は？

関わりによって非該当になった
わけではないようだ…

サービスを卒業した人への
かかわりは？

傾向は見たが…
「あれ？成功事例として
包括が意識していなかった…？」

6

元の生活に戻ることができた人（成功事例）を振り返ってみると…

【傾向】

- 転倒骨折の人が多いようだ。年齢は若いとも限らない。
- 「また自分でできるようになりたい！」という意向があり、最初の段階で支援者とゴール（卒業）を共有した上で取り組むことによって、元の生活に戻っていた。

87歳 女性 支援2

- ・脳梗塞、大腿骨頸部骨折
- ・担当者会議で「風呂に自分で入れるようになりたい」と合意形成
- 立ち上がりの不安をデイサービスで取り組み、ヘルパーの入浴介助を終了できた！
- 現在は「畑を見に行きたい」という目標に向かってデイサービスでリハビリ継続

83歳 男性 支援2

- ・腰椎圧迫骨折
- ・雪かきやプランター菜園などできることが徐々に増えてきた。担当者会議で、「健常者同様の体力測定の数値になったら卒業しよう！」と合意形成
- 現在は卒業し、庭で小さな畑をしたり、友人の来訪等で楽しんで暮らしている

◆気づき◆

転倒・骨折、関節疾患、虚弱の人は、元の生活に戻れるようにみんなで合意形成をして、取り組んでいくと元の生活に戻れるかも…！

→元の生活に戻れるかもしれない人への支援や関わりを見直そう！！

阿賀野市の目指す姿・ありたい姿

出来ていたことが出来なくなった高齢者が自信と意欲を取り戻し、元の生活を送ることが出来る

合意形成

元の生活とは？どんな生活に戻りたいか？
本人をその気にさせる提案や関わりで、合意形成をする！

取り組む

元の生活に戻れるように、支援者は本人を励ましながらか、みんなで取り組む！

元の生活へ

本人は自信と意欲を取り戻して、元の生活に戻る！



！ケースずつ大切に関わって積み上げていこう！！
うまくいった関わりや事例を包括内、そして事業所と共有していこう！！

しかし…

阿賀野市の現状は？



- 年だから仕方がない、元の生活に戻れないと思っている高齢者本人と家族
- 元の生活に戻れるような提案や支援を包括や生活支援コーディネーター、ケアマネ、サービス提供事業所が行っていない



ありたい姿と現状のギャップは大きい

9

なぜ現状なのか？



◆本人と家族◆

- 他に楽しめるものが見つからない、送迎がないと一人で行けない、歩いて行ける場所に楽しみがない
- 回復することをあきらめている
- 年をとっても原因によって回復することを知らない
- デイサービスしか選択肢がないと思っている
- 制度を知る機会がない

真因

◆地域◆

- 介護保険が申請すればすぐに使える制度として認識が広がった

◆生活支援コーディネーター(SC)◆

- サービス創出を主な業務としてきたため、地域資源をマッチングさせる意識ではなかった
- 1層2層兼務の生活支援コーディネーターが1人のため地域資源の把握やマッチング機能を果たすことが難しい
- 役割をケアマネなどに周知していない

◆ケアマネ・サービス提供事業所◆

- 成功事例の実感が少ない

◆地域包括支援センター◆

- 適切にアセスメントしていない
根拠に基づき改善への道筋を示していない
- 元の生活に戻るための総合事業という理解がなかった
- 成功とは何をもって成功とするのか明確化されていない
- 元の生活に戻るために地域のリハ職の協力を得ていない

10

問題意識の変化



事業を見直そうと
思っていたけど、
事業が問題でない！

現状の課題から整理しないと、
効果的な打ち手にならない！



介護保険料を
下げるとか、給付
を抑えるために
利用させないとか
そういうことでは
なかった



大事なことは、元の生活に戻るために
「こんな方法があるよ」と選択を提示し、
相手に選んでもらう
小さな取り組みから、しれっと変わって
いけばいい

- ★チームで一緒に悩んで、一緒に考えてきたから、考えがまとまった
- ★1人1人のケースや小さな変化を積みあげていく覚悟ができた

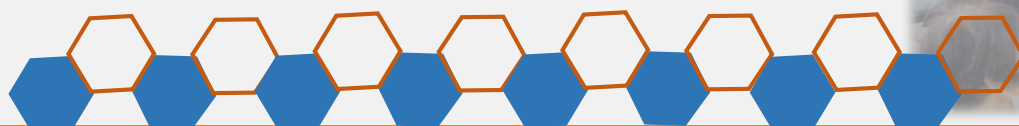
→介護保険の入り口の問題だよね！進むべき道が見えてきた！



取り組むこと(課題)

～阿賀野市の進む道～

- ①本人の自信や意欲の回復
- ②総合事業の本質の理解
- ③総合事業の方針の決定と、関係者への共有
- ④成功事例の積み上げと共有



実行プラン(アクティビティの具体策)



本人・家族

『もう年だから…』とあきらめない

アクティビティ どう働きかける

- アセスメント訪問や窓口で、元の生活がどんな生活をしていたのか、そして、どうなりたいのか気持ちや思いを聞く
- 元の生活に戻るために、介護保険以外にもいろいろなサービスがあることを提示する
- 年をとっても改善するということを伝える(成功事例を伝える)

具体的方策・工夫

- 本人は、思いを表出できる(どうしたいと言えるようになる)
- 必要に応じてリハ職も同行したアセスメント訪問を受ける

地域包括支援センター

まずは自分たちが変わる

・改善するという視点をもつ

・改善可能性を対象者や関係者に伝えられるようになる

アクティビティ どう働きかける

- 新規要支援認定者へのアセスメント訪問を実施する(申請理由が転倒骨折+α)
- 随時包括担当者に加え、リハ専門職と同行訪問する
- 訪問リハ(短期集中予防サービスモデル事業)の利用者の選定、実施
- 随時型通所C構築ための県事業(アドバイザー派遣事業)の応募
- 介護予防のための地域ケア個別会議にて取り組み事例の評価、検討

具体的方策・工夫

- アセスメント訪問を月3件程度は実施
- 介護予防のための地域ケア個別会議のブラッシュアップ

13

実行プラン(アクティビティの具体策)



地域のリハ職

市と同じ目線で協働し、本来の専門性を発揮してもらう

アクティビティ どう働きかける

- 地域リハビリテーション活動支援事業でのアセスメント訪問について説明をする
- アセスメント訪問に同行してもらう

具体的方策・工夫

- R7年3月までに説明をする

あがの市民病院

市と同じ意識を持ち、同じ目線で協働する

アクティビティ どう働きかける

- R8年開始に向けて、通所C(随時型)を構築するために協議をする
- 訪問リハビリテーションによる短期集中予防サービスモデル事業の協力を得るために協議をする

具体的方策・工夫

- R7年3月までに協議をする

14

実行プラン(アクティビティの具体策)



ケアマネ・事業所

市の考え方を理解し同じ目線を持つ

アクティビティ どう働きかける

- 総合事業と予防給付の違いや、今後の市の方針を説明する
- 包括で取り組んだ成功事例をケアマネに提示し共有する

具体的方策・工夫

- R7年2月研修開催
- R7年5月主任ケアマネ連絡会開催
- 介護予防のための地域ケア個別会議に参加してもらい成功事例を知る

(SC)生活支援コーディネーター

個から地域、地域から個への働きかけ

アクティビティ どう働きかける

- 生活支援コーディネーターの役割を再学習する
- 介護予防のための地域ケア個別会議や個別地域ケア会議に参加する
- 地区担当と地域の資源を把握する
- いろいろな事業所や活動の場に参加する(顔売る)

具体的方策・工夫

- 生活支援コーディネーター(SC)の役割を生活支援コーディネーター(SC)も含め包括、ケアマネがわかる
- 地域課題から不足の地域資源がわかる

地域

元の生活に戻れることを知る

アクティビティ どう働きかける

- 元の生活に戻れた高齢者の成功事例を広報や介護予防講演会、地域に出向いた際やホームページ等で広くPRする

具体的方策・工夫

- 成功事例を掲載する

15

次なる改善のための方策

(モニタリングの方法・アジャイル政策形成の仕掛け)



	初期アウトカム 働きかけた相手の望ましい変化	モニタリング方法 次なる改善につなげるため、左記変化を確認する方策
本人・家族	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人、家族が「そういうやり方もあるんだ」とわかる ● 元の生活に戻れる可能性を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ● 初回アセスメント訪問などで、元の生活に戻るための提案をした際に、「そういうやり方もあるんだ」と声を聞く ● 元の生活に戻るための取り組みを、本人、家族が選択できたか
地域包括	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人、家族が「そういうやり方もあるんだ」と言ってもらえる ● 成功事例が出てくる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 初回アセスメント訪問などで、元の生活に戻るための提案をした際に、「そういうやり方もあるんだ」と声を聞く ● 元の生活に戻るための取り組みを、本人、家族が選択できたか

小さな成功が大事




16

次なる改善のための方策

(モニタリングの方法・アジャイル政策形成の仕掛け)



	初期アウトカム 働きかけた相手の望ましい変化	モニタリング方法 次なる改善につなげるため、左記変化を確認する方策
地域 リハ職	<ul style="list-style-type: none"> ● 「必要だから一緒にやる」と言ってもらえる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 説明をした反応を確認する
あがの 市民病院	<ul style="list-style-type: none"> ● 「一緒にやろう」と言ってもらえる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 協議をした反応を確認する
ケアマネ 事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● 総合事業と予防給付は「違う」ということがわかる ● 高齢になっても元の生活に戻れることを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ● 研修実施後のアンケートで確認する
生活支援 コーディネーター (SC)	<ul style="list-style-type: none"> ● 生活支援コーディネーター(SC)にサービスにつなげるための相談が出る(ケアマネや包括から) ● 生活支援コーディネーター(SC)を名前で呼んでもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ● ケアマネからの相談件数
地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 良くなるんだと知る 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「元気になりたいんだけどどうしたらいいですか」という相談件数

振り返り(チームや個人に起きた変化)

うまくいった事例や
対応方法を共有する
ようになった

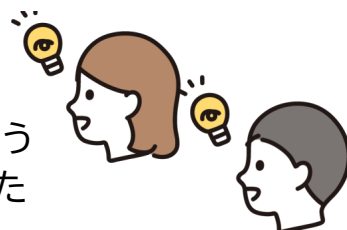


介護保険サービス以外の
資源を探して、提示する
ようになった

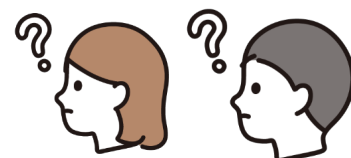
「こういう相談がきたよ」という
情報が飛び交うようになった
会話が増えた

生活支援コーディネーター(SC)
が地域ケア会議に参加するよう
になった

「取り組みによって元に戻る！」
と良くなる方法を模索するよう
になった



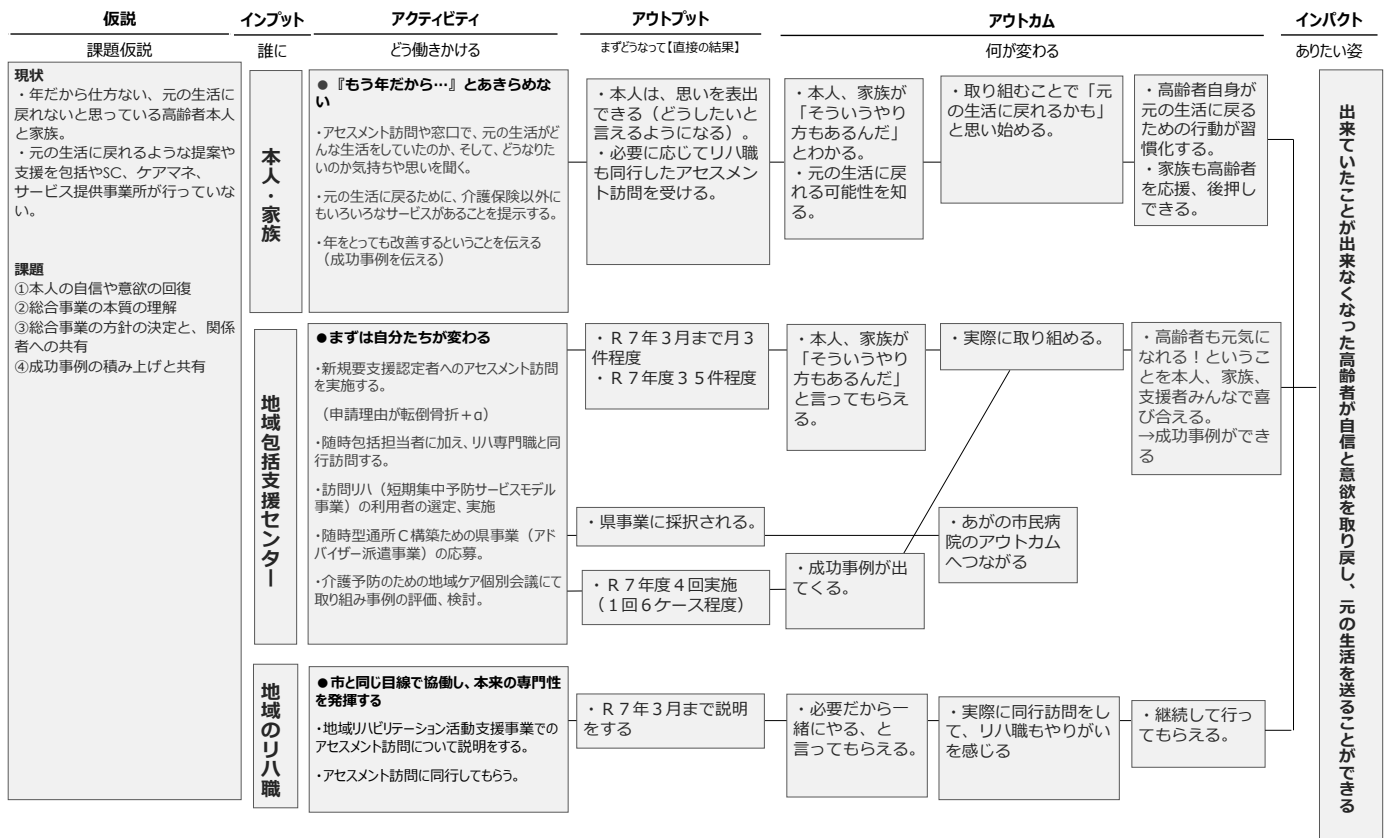
包括「もう年だから」という
考えにとらわれなくなった



同じような境遇の方の地域
資源は何かないかな？と
考えるようになった

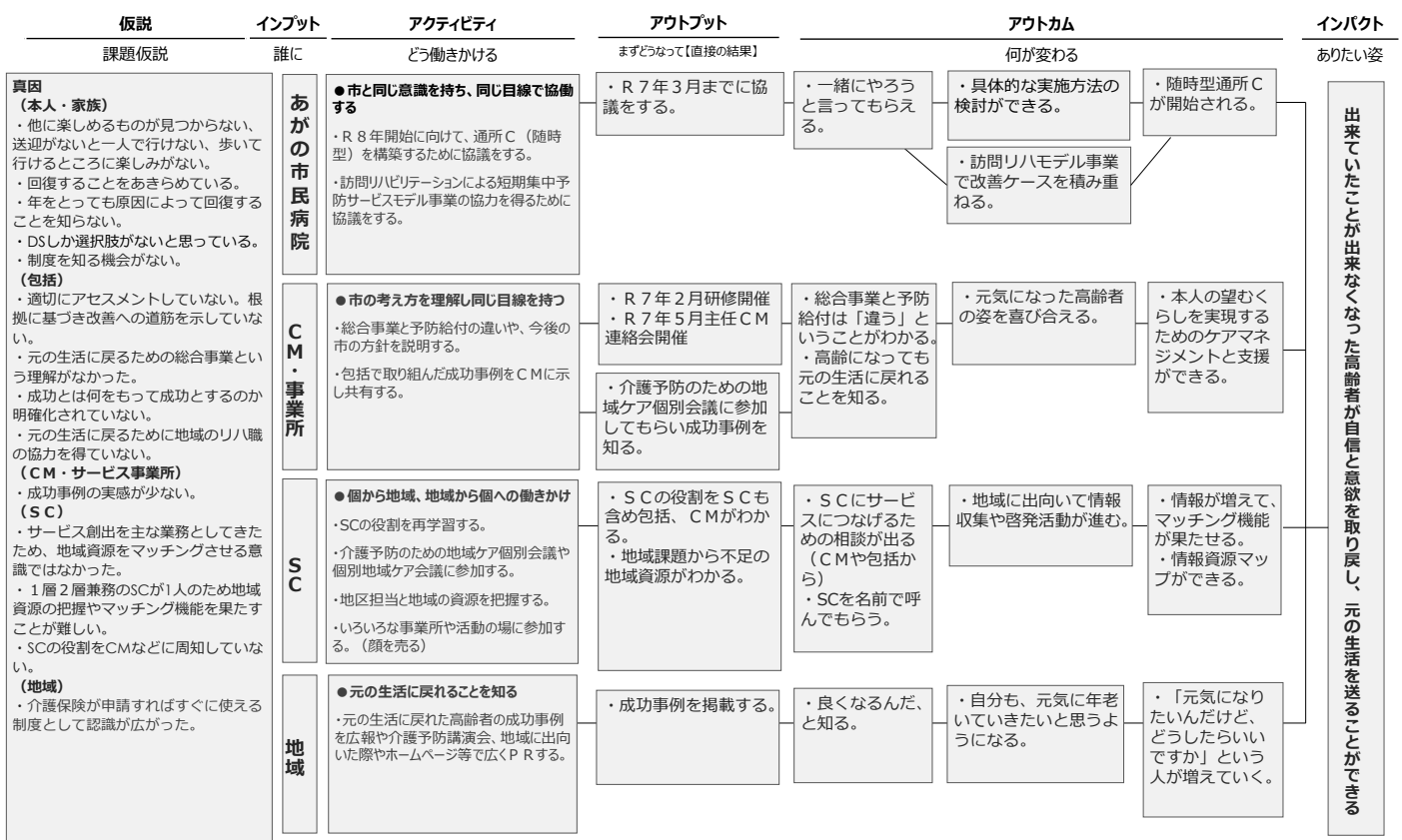
課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：出来ていたことが出来なくなった高齢者が自信と意欲を取り戻し、元の生活を送ることができる

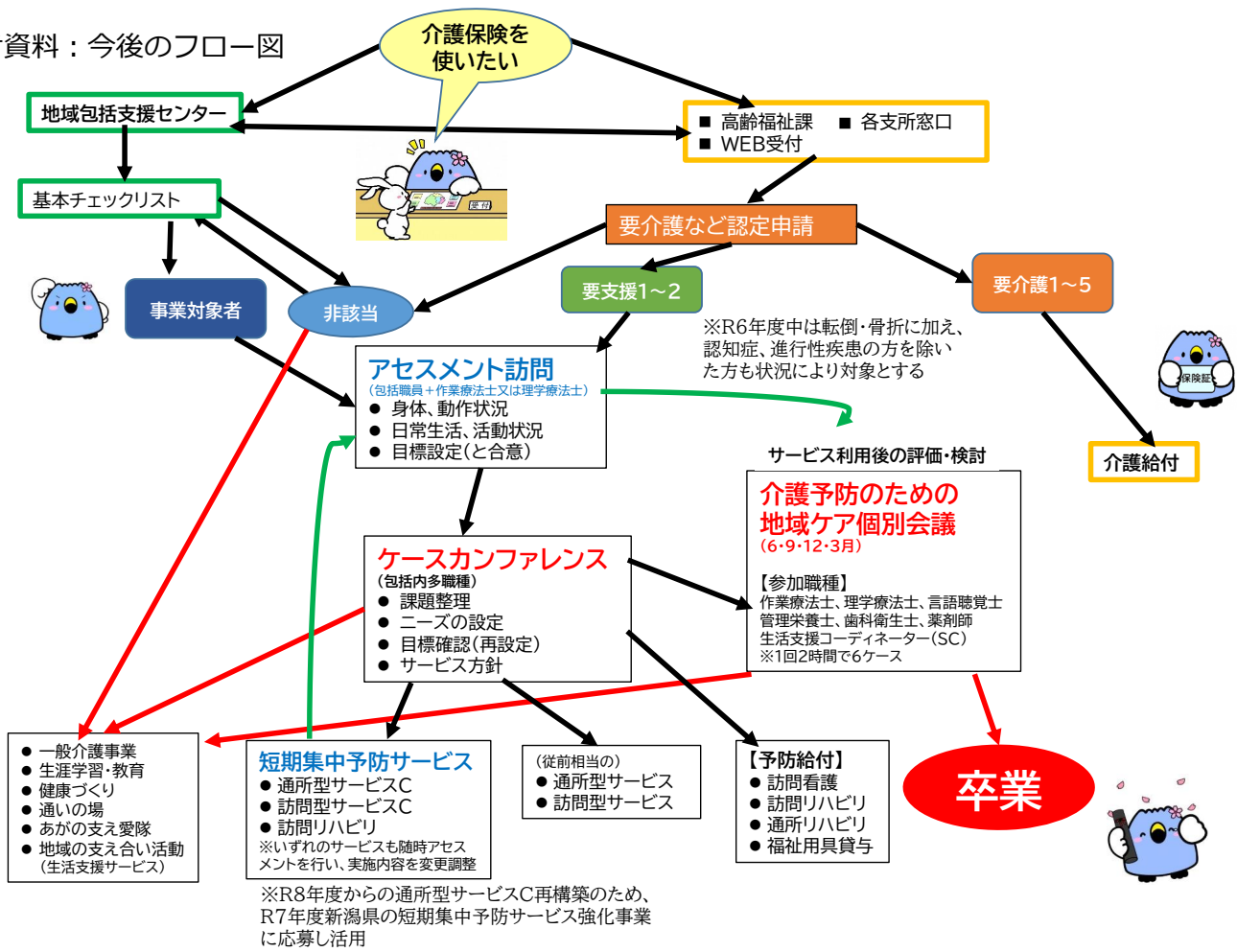


課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：出来ていたことが出来なくなった高齢者が自信と意欲を取り戻し、元の生活を送ることができる



参考資料：今後のフロー図



参考資料：今後のスケジュール感

実施項目	R6 ～12月末	1月～3月	R7 4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月	R8 4月～
通所型サービスC(随時型)	委託先との協議等	あがの市民病院との協議→合意形成		仕様書 R8年度からの実施に向けた協議 予算案作成 仕様書案、契約書案作成	ヒアリング		随意契約 事業実施
事業活用	県担当者へ打診済み	応募→採択	あがの市民病院での県短期集中予防サービス強化事業の実施				
訪問リハビリテーションによる短期集中予防サービスモデル事業	R7年度限り	あがの市民病院訪問看護ステーション、あがの市民病院との協議	アセスメント訪問→包括内でのケースカンファレンスで利用者を選定→実施			年度をまたぎそうなる場合は随時型通所型サービスCへの移行ができるように調整	
通所型サービスC(現行教室型)	めきモリ講座 R7年度仕様書の見直し(講座終了後にひとりでも取り組めるような動機付け支援を明記)	12/5～第2クール実施中 R7年度仕様書の見直し(講座終了後にひとりでも取り組めるような動機付け支援を明記)	1/31までにR7年度参考見積取得 2月末を目途に指名競争入札で委託先を決定(場合によっては随意契約に移行)	委託契約 委託先との打ち合わせ 第1クール(予定)5月中旬～	第2クール(予定)9月上旬～	第3クール(予定)12月上旬～	
新規要支援認定者へのアセスメント訪問	申請理由が転倒骨折+α	随時包括担当者+渡部(PT)で実施	随時包括担当者+渡部(PT)または地域リハ活動支援事業で実施 年度内で12件程度	随時包括担当者+地域リハ活動支援事業(または渡部)で実施 毎月3件程度を目標にケースを積み上げ	アセスメント訪問対象者の拡大について検討		
介護予防のための地域ケア個別会議	R7年度から豊明市方式に変更	現行方式で3月19日(水)午後開催	6月18日(水)午後6ケース程度検討	9月17日(水)午後6ケース程度検討	12月17日(水)午後6ケース程度検討	3月18日(水)午後6ケース程度検討	
地域リハビリテーション活動支援事業		アセスメント訪問への同行サロン、ふれあい広場ささかみへの介入 第2回打ち合わせ会でR7年度からの事業ならびに総合事業でのリハ職のかかわり方について説明	アセスメント訪問への同行	状況により9月議会で補正予算を計上	R8年度予算案の作成		
介護予防支援・介護予防ケアマネジメント委託事業所への対応		2月開催予定の介護支援専門員研修会で変更理由や今後の方針等を説明	6月18日(水)午後介護予防のための地域ケア個別会議への傍聴参加	9月17日(水)午後介護予防のための地域ケア個別会議への傍聴参加	12月17日(水)午後介護予防のための地域ケア個別会議への傍聴参加	3月18日(水)午後介護予防のための地域ケア個別会議への傍聴参加	
新たなサービスの創出	通所型サービスA・B 訪問型サービスA・B・D						
総合事業の理解		地域包括支援センター職員個々でガイドラインを読み込み					

福山市の 重層的支援体制整備事業における 多機関協働の在り方



ばらのまち福山
イメージキャラクター「ローラ」

2025年（令和7年）2月4日

福山市

社会福祉法人 福山市社会福祉協議会

チームメンバーの紹介



重層的支援体制整備事業の所管課と
委託事業者で参加



たかまつ 高松	ひさや 寿弥	福山市役所 保健福祉局 福祉部 福祉総務課 支援調整担当次長
すえむね 末宗	よしみ 喜美	福山市役所 保健福祉局 福祉部 福祉総務課 主事（支援調整担当）
ふじわら 藤原	あきひろ 章弘	社会福祉法人 福山市社会福祉協議会 生活困窮者自立支援センター 次長
かきはら 垣原	ともか 知佳	社会福祉法人 福山市社会福祉協議会 多機関協働ステーション COCOCALA 主事（社会福祉士）

重層的支援体制整備事業とは・・・

市町村全体の支援機関・地域の関係者が断らず受け止め、
つながり続ける支援体制を構築することをコンセプトに、
「属性を問わない相談支援（包括的相談支援事業・アウト
リーチ等を通じた継続的支援事業・**多機関協働事業**）」、
「参加支援」、「地域づくりに向けた支援」の
3つの支援を一体的に実施するもの

福山市の概要



①人口

- 福山市 458,192人 (215,668世帯)
- 広島県 2,750,540人 (1,340,297世帯)

②65歳以上

- 福山市 134,276人
- 広島県 822,599人

③高齢化率

- 福山市 29.3%
- 広島県 29.9%

(R6.1.1現在)

総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」より)



- 広島県の南東にあり、温暖な瀬戸内海沿岸のほぼ中央に位置する。福山駅を中心に市街地が広がり、市の中心部から少し離れたところに田畑が広がる。
- 1916年7月1日に市政を施行して以来、10回（1市30町村）の合併を重ね、中四国地方有数の都市となる。（面積：517.72Km²）
- 産業構造として、鉄鋼や電子デバイス、機械、造船のほか、世界のハイブランドも活用する高品質なデニムに代表される繊維産業など、多様な製造業が集積している。
- JR山陽新幹線のだみ号の停車や山陽自動車道、国の重要港湾である福山港など、中四国地方の交通・物流機能の拠点。

3

プログラム参加動機

- 移行準備期間を経て、2024年（令和6年）4月から重層的支援体制整備事業を本格実施
- 包括的な支援体制を整備するために、担当者として日々取り組んでいるけど、自分たちが進む方向はこれで良いのか、なんだかモヤモヤしており、プログラムのチラシに記載されていた「走りながら考え、考えながら走る」という言葉に惹かれました。（今、思えば、自分たちの行動や考え方を変えたい！このままじゃいけない！！と思っていたと思う。）
- はじめてみたけど、どこから取り組んで良いのか分からない。

当初の問題意識

- 支援会議及び重層的支援会議で扱った事例の中で、チームメンバーがモヤモヤしている事例を元に検討し、行政・福祉支援機関及び民間団体等が現実の問題に向かい、課題認識を共有し、連携・協働するための一つのモデルを作りあげたい。（後で方向転換する事となる。）

4

1 課題検討過程

■ 迷走

メンタリング・フォローアップを受ける中で、自分たちの役割とは何か？
重層的支援体制整備事業の支援のカタチとは？

「はっきりこうだ！」と言えない自分たち…

今、取り組んでいる事って、どうなのかな？と思い始めた。

■ 軌道修正 その1（自分たちの役割を再認識）

自分たち（多機関協働事業者）の主たる役割は、「マネジメント」だけど、
支援が必要な人・世帯に「尊厳を守る支援」・「自律に向けた支援」・

「伴走による支援」・「包括的な支援」・「地域づくりに向けた支援」を
ひとつの「チーム」として行えるように、時にはアセスメントを担ったり、
時にはプレイングマネージャーとなったり、時には助言者となったり、
立場を変えながら、支援者が孤立しないように「支援者支援」を
行わなければならない。

5

■ 軌道修正 その2（現在の体制の問題）

①自分たち（多機関協働事業者）が、既存の制度では対応できない個別
ケースへ支援の主担当として、ケースに対し直接的な支援を行う事が
大半を占めている。

②「多機関協働事業」は、課題が複合化した難しい相談ケースの投げ込み
先とされていることが多々ある。また、相談すれば、何でも解決でき
る先とされていることも多々ある。

③庁内連携のモヤモヤ・行政×支援機関の連携モヤモヤ・支援機関×支援
機関の連携モヤモヤ等、現場では連携の壁にぶつかっている。 等

■ 軌道修正 その3（現在の体制の原因）

①重層的支援体制整備事業の目的・意義の理解ができていない。

②多機関協働事業者の役割が見える化できていない。

③支援者を孤立させない仕組みを整えられていない。 等

6

■ 方向転換

① 三歩進んで二歩下がる

回を重ねながら、自分たちが考える多機関協働事業について、
少しずつ明確になる。
自分たちが多機関協働事業者として取り組むべき本当の課題は
いったい何なのか？

② 尻に火が付く

テーマの方向性が定まったのは、終盤・・・
解決の糸口を見つけてからは、
チームメンバーで時間を合わせ、じっくりと考えました。

③ 鉄は熱いうちに打て

プログラムに参加して、多機関協働事業について一度立ち止まり、
考えることができた。重層的支援体制整備事業 本格実施 1 年目の今、
福山市全域の支援機関等に「**福山市の重層的支援体制整備事業における
多機関協働の在り方**」を見える化し、伝えていくことにした。

7

2 実行プラン (アクティビティの具体策)

誰に	アクティビティ どう働きかける	具体的方策・工夫
重層事業担当者（多機関協働ステーション COCOCALA 及び福祉総務課）	<ul style="list-style-type: none">➤ 重層事業（多機関協働）を分かりやすく伝えるための準備をする。➤ 重層事業（多機関協働）について学ぶ。〔アジャイル型地域包括ケア政策共創プログラムに参加〕➤ 支援者を孤立させない仕組みづくり「支援者支援」に取り組む。➤ 他機関に出向く。➤ 重層事業担当者で定期的にミーティングする。	<ul style="list-style-type: none">➤ このプログラムのプロセスを振り返り吸収したことを整理する。➤ 出前講座または支援者支援会議等で福祉分野に携わっていない人にも分かりやすい言葉で説明する。（専門用語はなるべく使わずに共通言語を用いる。）➤ 出会っていない分野同士が出会う場の創設。（出会う分野の重層化）➤ 自分のことや支援する中で困難なケースについて話しやすい雰囲気づくりをする。➤ 分野内の所属機関・部署で受け止め、相談し合える体制を整える。➤ 時にはアセスメントを担ったり、時にはプレイングマネージャーとなったり、時には助言者となったり、立場を変える。➤ 一部委託または全部委託であっても、まかせっきりにせず、一緒に福山市における重層事業について考える。（パートナーであることを忘れない。）

誰に	アクティビティ どう働きかける	具体的方策・工夫
ケース 担当者・ 担当課・ 担当機関	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 支援者支援会議へ参加する。 ➤ 支援会議での役割を理解する。 ➤ 支援者にとっての「困難ケース」に出会う。 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 言われたから参加したという気持ちではなく、自分にも関係があることだと理解し、積極的に参加し、他分野の人とつながる。（結果として自分のためになる。） ➤ 多機関協働事業について理解する。 ➤ 支援会議を開催しても、ケースを手放さず、主体的にケースの対応を続ける。 ➤ 分野内の所属機関・部署で相談する。対話する。（まず、関係者を増やす。）
ケース 協力機関	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 支援者支援会議へ参加する。 ➤ 支援会議へ参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 言われたから参加したという気持ちではなく、自分にも関係があることだと理解し、積極的に参加し、他分野の人とつながる。（結果として自分のためになる。） ➤ 多機関協働事業について理解する。 ➤ 支援会議後も継続的にケースに関わり、みんなで課題に向き合い続ける。

9

3 次なる改善のための方策

（モニタリングの方法・アジャイル政策形成の仕掛け）

誰が	初期アウトカム 働きかけた相手の望ましい変化	モニタリング方法 次なる改善につなげるため、左記変化を確認する 方策
重層事業担 当者（多機 関協働ス テーション COCOCAL A及び福祉 総務課）	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 重層的支援体制整備事業の目的・意義を伝えられるようになる ➤ 多機関協働事業の役割を分かりやすく伝えられるようになる ➤ 支援機関等から頼りにされる ➤ 対応すべき課題を知る ➤ 重層事業担当者での会話が増える 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 参加者への声かけ、聞き取り →理解度や関心度の段階評価アンケートや自身の支援における視点の変化等の自由記述式のアンケート ➤ 参加者の様子を観察する（雰囲気はどうかも観察する） ➤ 作成したロジックモデルを支援関係者に説明する ➤ 入ってくる相談内容を精査する ➤ 支援につながっていなかったケースの掘り起こしを行い、支援の抜け漏れを把握する ➤ 定期的にミーティングを開催しているか確認する

10

誰が	初期アウトカム 働きかけた相手の望ましい変化	モニタリング方法 次なる改善につなげるため、左記変化を確認する 方策
ケース 担当者・ 担当課・ 担当機関	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 知識（重層事業に関する事等）が増える ➤ つながっていない人とつながる ➤ 困っている人・世帯がいると認識できる ➤ 組織内での会話が増える ➤ 心理的な安心を得る ➤ 事例の課題が明確になる 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 支援者支援会議の参加者はどうか（人数・分野は増えているか） ➤ 参加者（または支援者）への声かけ、聞き取り ➤ 参加者の様子を観察する（雰囲気はどうか） ➤ 支援会議開催後に多機関協働事業者が主担当として支援していないか確認する
ケース 協力機関	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 知識（重層事業に関する事等）が増える ➤ つながっていない人とつながる ➤ 困っている人・世帯がいると認識できる ➤ 対応すべき複合的な課題を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 支援者支援会議の参加者はどうか（人数・分野は増えているか） ➤ 参加者への声かけ、聞き取り ➤ 参加者の様子を観察する（雰囲気はどうか） ➤ 支援会議開催後も継続的に関わっているか確認する

11

4 振り返り（チームや個人に起きた変化）

- 多機関協働事業について、
自分たちの役割（支援者支援）を再認識できたことで、
他機関への説明の仕方が変わった。
- 各分野の支援機関が対応に困った複合的な課題について、
相談してきた際に自分たちの動き方が変わりつつある。
（ケースの主担当者とはならず、一緒に考え行動する。）
- 仲間をつくり、関係者を動かすために、
誰にどう働きかけをしていけば良いのか分かった。

12

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ（行動計画）	アウトプット（実績）	アウトカム（変化・あるべき姿）	インパクト	
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなって【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿	
<p>現状</p> <p>【重層事業担当者（多機関協働ステーションCOCOCALA及び福祉総務課）】</p> <p>➢ 重層事業担当者としての役割の整理ができていない。</p> <p>➢ なぜ重層事業に取り組むのかを分かりやすく伝えることができていない。</p> <p>➢ 分野を超えた連携をする仕組みが必要ということを他分野に理解してもらえていない。</p> <p>➢ 多機関協働事業の役割を分かりやすく伝えることができていないため、「難しいケースに対応してくれるところ」というイメージを持たれることが多々ある。</p> <p>➢ 支援機関が対応に困った複合的なケースを受け取っている。そのため、ケースの担当者となり、ケースを抱え込んでいる。</p> <p>➢ 体制・仕組みづくりについて、現状を把握し、何が足りていないのか、どう動いていく必要があるのか等、じっくりと話し、検討することができていない。</p>	ココカラ・福祉総務課	<p>①重層事業（多機関協働）を分かりやすく伝えるための準備をする</p> <p>【方法】</p> <p>➢ 出前講座</p> <p>➢ 支援者支援会議（目的：支援者間の連携強化・相互理解・支援者のスキルアップ等）</p> <p>・福山市全域開催（年4回）</p> <p>・拠点支所単位ごとに開催（5ブロックごとと年2回）</p> <p>【内容】</p> <p>➢ 重層事業は、様々な分野や主体が連携しやすくなるためのツールであること。</p> <p>➢ 支援・つながり・出会いの重層化を目的としていること。</p> <p>⇒「相談支援（制度内連携）」だけに着目した仕組みづくりではなく、相談支援と住民主体の地域活動や地域資源のそれぞれが取り組んでいる・できていることの協働や地域資源の開発、充実、それらを循環（連続性）を持たせることで、地域住民も専門職も誰もが孤立しない仕組みづくりを行う。</p> <p>➢ 相互理解の促進。</p>	<p>出前講座の依頼が入り、開催できる</p> <p>➢ 出前講座で重層事業の目的・意義及び多機関協働事業の役割を伝えることができた。（回数）</p> <p>➢ 重層事業に関心を持つ機関が増え、出前講座の依頼が増えた。</p> <p>➢ 参加者の状況（人数・分野）が分かり、どのような人たちに伝えることができたのか把握できた。</p> <p>支援者支援会議を開催する</p> <p>➢ 福山市全域で年4回実施した。</p> <p>➢ 拠点支所単位ごと（5ブロックごと）に年2回が実施した。</p> <p>➢ 参加者の状況（人数・分野・感想・意見）が分かり、理解の促進及び課題が把握できた。</p>	<p>重層的支援体制整備事業の目的・意義を伝えられるようになる</p> <p>➢ 重層事業の理解を深め、言語化することができる。（語れるようになる）</p> <p>➢ 福山市のめざす姿（ありたい姿）を整理する。</p> <p>➢ 分かりやすい資料を作る。</p> <p>多機関協働事業の役割を分かりやすく伝えられるようになる</p> <p>➢ 自分たちの重層事業の取組み方、進め方を振り返る。</p> <p>➢ 問題点を整理し、考える。</p> <p>➢ 自分たちの今までの動き方とこれからの動き方を整理する。</p>	<p>重層事業（多機関協働）を分かりやすく伝えることができる</p> <p>➢ なぜ重層事業（多機関協働）が必要なのかを伝えることができる。</p> <p>➢ 自分たちの変化を伝えることができる（できていなかった部分も含む）</p> <p>➢ ケース担当者（担当機関・担当課）、ケース協力機関に何ををお願いしたいのかが分かり、伝えることができる。</p> <p>重層事業（多機関協働）が機能していくための資源を集めるために動く。</p> <p>➢ ケースの分析を行う。（課題の把握・傾向等）</p> <p>➢ 重層担当者自身のネットワークを広げていくために、積極的に外に出る。</p>	<p>ケース担当者が孤立しないためのネットワークを拡げていくきっかけづくりの立場として動くことができる</p> <p>➢ ケース担当者が困っている時に、一緒に考えたり、できそうなことを掴まえに行ったりするなど、コーディネートすることができる。（ケースの穴埋めで動く機能ではない）</p> <p>➢ ケースや会議を通して、日頃から分野を超えて、気軽に相談・意見交換ができるような顔の見える関係づくりのきっかけの場をつくることができる。</p> <p>➢ ケース担当者等と地域資源をつなげていくことができる。</p> <p>支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる</p>

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ（行動計画）	アウトプット（実績）	アウトカム（変化・あるべき姿）	インパクト		
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなって【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿		
<div>課題【共通】</div> <div>➢ 何のための重層事業なのか、重層事業の目的・意義の理解</div> <div>➢ 多機関協働事業における多機関協働ステーションCOCOCALA（または福祉総務課）の役割を見える化</div> <div>➢ 多機関・多職種での連携・協働</div> <div>➢ 支援者を孤立させない仕組みを整える（まずは、分野内の所属機関・部署で受け止め、相談し合える体制）</div>	ココカラ・福祉総務課	<div>②重層事業（多機関協働）について学ぶ</div> <div>【アジャイル型地域包括ケア政策共創PGに参加】</div> <div>【方法】</div> <div>➢ ①に記載したものと同様</div> <div>➢ 各支援機関が抱えている課題を共有する場に出向く。（事例を通じて伝える）</div> <div>【内容】</div> <div>➢ 多機関協働ステーションCOCOCALA及び福祉総務課は、担当者が対応に困った複合的な課題を投げ込むところではない。また、個別の対象者への支援や、地域活動を一手に担うところではない。（支援者支援に徹する）</div> <div>➢ 複合的な課題を抱える支援者を孤立させない仕組みづくり「支援者支援」に取り組む。</div> <div>⇒庁内外の多機関・多職種が集まり、日々の困りごとの共有やお互いの業務内容を知ることができる支援者支援会議を開催する。（出会う機会をつくる）</div>	<div>➢ 相互理解の促進が図られ、顔の見える関係性が生まれた。</div> <div>➢ 多機関・多職種での連携・協働の重要性が理解でき、ネットワークづくりが必要であることの声があがる。</div> <div>多機関協働事業の役割が理解される</div> <div>➢ ケースを受け取るのではなく、ケースの相談先のひとつとなった。</div>	<div>支援機関等から頼りにされる</div> <div>➢ 必要とされる。</div> <div>➢ 意見を求められる。</div> <div>対応すべき課題を知る</div> <div>➢ 支援につながっていないケースの掘り起こしができる。</div> <div>➢ 多機関・多職種が連携・協働する上での壁を知る。</div> <div>重層事業の周知・啓発となる</div> <div>➢ 支援者に対して重層事業実施の理解を得るための取組をする。</div>	<div>多機関協働事業の機能を発揮する</div> <div>➢ 個別ケースの支援が円滑に進むように支援機関間の調整をする。</div> <div>➢ 多機関協働事業者がケースの穴埋めすることができない。</div> <div>➢ 他機関からの相談を安心して受け止めることができる。</div> <div>支援の質が変わる</div> <div>➢ 支援者が持っている資質を最大限に発揮できる。</div> <div>➢ 支援内容が充実し、質が向上する。</div> <div>➢ ケースのたらい回しが減る。</div>	<div>個別支援に関わるネットワークの形成</div> <div>➢ 多機関・多職種で助け合う場が自然に生まれ、人が集まる。（支援の輪がひろがる。）</div>	支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ（行動計画）	アウトプット（実績）	アウトカム（変化・あるべき姿）	インパクト
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなって【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿
真因【共通】 ➢ 重層事業の目的・意義の理解ができていない。 ➢ 多機関協働ステーションCOCOCALAは、困難ケースを対応するための新しい部署だと思っている人がいる。 ➢ 困難ケースに出会ったときに、どうしてよいのか分からない。（分野外のことが分からない。） ➢ 所属する分野以外の支援者とのつながりが少ない。または、出会う機会がない。 ➢ 「支援＝制度」という固定概念。 ➢ 地域資源とのつながり（ネットワーク）がある支援者が少ない。 ➢ 地域資源を把握できていない。 ➢ 地域資源を含めて支援してきた実績がない（少ない）。	ココカラ・福祉総務課	⇒他機関に出向き、各分野の支援機関が対応に困った複合的な課題について、ケース担当者・担当機関・担当課と一緒に考え支援する。 （課題の解きほぐし、役割の交通整理、一緒に考えてくれる人・機関を増やすなど支援者が動きやすいように調整する） ⇒支援会議の随時開催 ➢ 庁内外の多機関・多職種が集まる機会をつくり、支援者のネットワークを広げる。 ➢ 伴走型支援（支援対象者とのつながり続けること）ができる体制をつくる。 ③ ケースの積み上げ ➢ 多機関協働事業に相談された内容及び対応を振り返り、体制の分析を行う。（個別ケースの支援のために組織間のマネジメントを行う。） ④ 重層事業担当者で定期的なミーティングを実施する ➢ 月3回開催する。 〔内容〕 前月の反省を踏まえた改善案・動きを検討したり、体制におけるアイディア出しを話し合い、翌月以降へ反映する。	重層事業担当者でミーティングを開催する ➢ 定期開催（回数） ➢ お互いの思い、人柄が分かり、気軽になんでも話せる関係性ができた。 ➢ 重層事業に対する理解や福山市としてめざす方向性、仕組みづくりのすり合わせや確認ができた。	重層事業担当者での会話が增える ➢ 担当者の不安や悩みを安心して話せる。 ➢ 一部または全部委託の場合でも、丸投げしない。 お互いが信頼できる関係性を構築する ➢ 重層事業を常に進化させるための対話ができる。 ➢ 重層事業担当者自体が孤立しない。 ➢ 職員体制を柔軟に検討する。 同じ方向を向いて取組む人たちがあふれる 福山市の重層事業のカタチを常に進化させる ➢ 変化におそれない。 ➢ 地域社会の変化に対応し続ける。 人事異動後も変わらない体制 ➢ 組織内で業務の流れを共有する。（標準化させる。）	支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ（行動計画）	アウトプット（実績）	アウトカム（変化・あるべき姿）	インパクト		
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなって【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿		
<div>現状</div> <div>【ケース担当者・担当課・担当機関】</div> <div>➢ 対応に困った複合的な課題について、一緒に考えてくれる人がいない。</div> <div>➢ ケースの抱え込みが起きている。（個別の支援をしているが、世帯員の相談が他機関から入ってくる。）</div> <div>➢ とりあえず、重層事業担当者に相談すれば良い（投げ込み寺）と考えている支援者もいる。（対応に困った複合的な課題は、多機関協働事業の事業者が行うものと理解している。）</div> <div>➢ ケースをつないだら終わりという考え方の支援者もいる。</div> <div>➢ 「支援＝制度」という固定概念の支援者が多い。</div> <div>➢ 分野外のことには手を出す余裕がない。</div> <div>課題【共通】</div> <div>➢ 何のための重層事業なのか、重層事業の目的・意義の理解</div> <div>➢ 多機関協働事業における多機関協働ステーションCOCOCALA（または福祉総務課）の役割を見える化</div>	ケース担当者・担当課・担当機関	<div>①支援者支援会議へ参加する</div> <div>➢ 重層的支援整備事業の目的・意義を理解する。</div> <div>➢ 多機関協働事業の役割を理解する。</div> <div>➢ 専門分野以外の必要な情報を収集する。また、専門分野の情報を提供する。</div> <div>➢ グループワークを通して、他機関の支援者と対話し、お互いのことを知る。（顔の見える関係性ができる。）</div> <div>➢ ケーススタディを通じて、実際の課題への対応力を上げる。（実践的なスキルの習得・問題解決力の強化等）</div> <div>➢ 対応に困った複合的な課題を気軽に相談できる人脈を得る。</div> <div>➢ 本人同意を得られない場合でも、複合化した課題を抱える相談者に関する情報の共有等を安心して行える場（支援会議）があることを知る。</div> <div>➢ 所属機関・部署に持ち帰り、情報を共有する。</div>	<div>支援者支援会議へ参加する</div> <div>➢ 福山市全域または拠点支所単位ごと（5ブロックごと）に開催されているものに参加した。</div> <div>➢ 重層事業の目的・意義を理解した。</div> <div>➢ 多機関協働事業の役割を理解した。</div> <div>➢ 参加者同士で情報交換を行った。（支援を実施するための引き出しが増えた。）</div> <div>➢ 所属機関・部署に持ち帰り、情報を共有した。</div>	<div>知識が増える</div> <div>➢ 重層事業に関すること（多機関協働事業の役割を含む）</div> <div>➢ 専門分野以外の必要な情報（業務・制度・取組等）</div> <div>つながっていない人とつながる</div> <div>➢ 会ったことがない人たちの顔がとりあえず分かるようになる。</div> <div>➢ 参加者が廊下等ですれ違う場合、挨拶する関係となる。</div> <div>➢ 支援者支援会議に次も参加しようと思う。</div> <div>困っている人・世帯がいると認識できる</div>	<div>知識が増える</div> <div>➢ 重層事業について自分の言葉で説明できる。</div> <div>➢ 実際の課題への対応力が向上する。</div> <div>➢ 自分自身の支援について一度立ち止まり、考えるきっかけとなり、支援の質が深まる。</div> <div>➔分野外の課題で支援につながっていないケースについて、何か手立てがないか検討する人が増え、支援内容が充実する。</div> <div>お互いが共感し合える関係性を構築できる</div> <div>➢ どういう考え方をする人で、どういう人となりかが分かる</div> <div>➢ 不安な悩みを安心して気軽に共有できる。</div> <div>➢ 参加者が同じ思いを持ち、意欲的に参加する。</div> <div>安心して相談を受け止めることができる</div> <div>➢ 自分が相談できる人・場所がある。</div> <div>➢ どこに相談したら良いのか分かる。</div>	<div>支援の引き出しが増える</div> <div>➢ 支援につながっていない潜在的な人を早期に発見することができ</div> <div>➢ 分野外の課題で気になる事案について、見て見ぬふりせずに相談できる。</div> <div>個別支援に関わるネットワークの形成</div> <div>➢ 信頼感を持って一緒に仕事ができる。</div> <div>➢ 価値観を相互に尊重し共有できる協働するハードルが下がり、早期な支援介入ができる。</div> <div>➢ 個別課題や地域課題を解決するために必要な役割が明確になる。</div>	支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる

安心して相談を受け止めることができる
 ➢ 自分が相談できる人・場所がある。
 ➢ どこに相談したら良いのかわかる。

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ（行動計画）	アウトプット（実績）	アウトカム（変化・あるべき姿）	インパクト	
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなる【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿	
<p>➢ 多機関・多職種での連携・協働</p> <p>➢ 支援者を孤立させない仕組みを整える（まずは、分野内の所属機関・部署で受け止め、相談し合える体制）</p> <p>真因【共通】</p> <p>➢ 重層事業の目的・意義の理解ができていない。</p> <p>➢ 多機関協働ステーションCOCOCALAは、困難ケースを対応するための新しい部署だと思っている人がいる。</p> <p>➢ 困難ケースに出会ったときに、どうしてよいのか分からない。（分野外のことが分からない。）</p> <p>➢ 所属する分野以外の支援者とのつながりが少ない。または、出会う機会がない。</p> <p>➢ 「支援＝制度」という固定概念。</p> <p>➢ 地域資源とのつながり（ネットワーク）がある支援者が少ない。</p> <p>➢ 地域資源を把握できていない。</p> <p>➢ 地域資源を含めて支援してきた実績がない（少ない）。</p>	<p>ケース担当者・担当課・担当機関</p>	<p>②支援会議での役割を理解する</p> <p>➢ 対応に困った複合的な課題について、所属機関・部署で共有し、所属分野の会議体で協議・検討を行う。</p> <p>➢ 所属の分野では手立てがない場合、多機関協働ステーションCOCOCALA（または福祉総務課）へ相談する。</p> <p>➢ 支援会議の開催に向けて、多機関協働ステーションCOCOCALA（または福祉総務課）と連携する。（開催日の調整・参加者の招集等）</p> <p>➢ 支援会議でケースの担当者として、現状・課題・困っていること（＝開催の目的）を参加者へ伝える。</p> <p>➢ 支援会議を開催しても、ケースを手放さず、主体的にケースの対応を続ける。</p> <p>③支援者にとっての「困難ケース」に出会う</p> <p>➢ 対応に困った複合的な課題を相談する。（所属機関・部署・積み上げてきた他分野の人脈）</p> <p>➢ 複合化した課題を抱える人・世帯を早期に情報共有する。</p>	<p>支援会議の開催</p> <p>➢ 担当者が対応に困った複合的な課題について、所属の分野の会議体で協議・検討を行った。</p> <p>➢ 所属の分野では手立てがないものを知ることができ、多機関協働ステーションCOCOCALA（または福祉総務課）へ相談した。</p> <p>➢ 支援会議を（随時）開催した。</p> <p>対応に困った複合的な課題を相談できる</p> <p>➢ 課題について一緒に考える仲間ができた。</p> <p>➢ 一人で抱え込まず、気持ちに余裕が生まれた。</p> <p>➢ 支援が必要な人を早期に支援につなげることができた。</p>	<p>組織内での会話・対話が増える</p> <p>➢ 担当者の不安や悩みをまずは、組織内で共有し、検討することができる。</p> <p>➢ 組織力の強化となる。（組織として支援機能を発揮できる。）</p> <p>心理的な安心を得る</p> <p>➢ 不安や悩みを一人で抱え込むことがなくなる。</p> <p>➢ 対応に困った複合的な課題を共有することで関係者が増える。</p> <p>➢ 支援者が長期で一人で悩むことがなくなり、疲弊することが減る。</p> <p>事例の課題が明確になる</p> <p>➢ 自分以外の視点・見立てを知ることができる。</p>	<p>安心して話せる場ができる</p> <p>➢ 他機関への信頼と相互理解が生まれる。</p> <p>➢ 他機関の支援会議に参加する場合、意欲的に傾聴し、協力しようという気持ちとなる。</p> <p>つながる関係者の質が変わる</p> <p>➢ ケースの投げかけが減る。</p> <p>➢ チーム支援が可能となる。</p> <p>包括的な相談支援に向けたネットワークの土台ができる（支援の輪が広がる）</p> <p>➢ 多機関協働事業者を挟み、会議を開催しなくても対話ができ、円滑に多機関で協働することができる。</p> <p>➢ 多機関・多職種で助け合う場が自然に生まれ、人が集まる。</p> <p>➢ 業務負担が減る。 →ケース支援者・担当課・担当機関が相談できる先が増える。 →重度化する前（切れ目のない支援）につなげることができる可能性が増える。</p> <p>ケースを通して支援の引き出しが増える</p> <p>➢ お互い様（互いに助けたり助けられたり）の関係が生まれ、専門分野外の支援者と訪問等の対応で協力できることを知る。</p> <p>➢ 自分が対応に困った場合、相談できるつながりを得ることができる。（バーンアウトしない）</p>	<p>支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる</p>

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ	アウトプット	アウトカム	インパクト		
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなる【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿		
<div>現状</div> <div>【ケース協力機関】</div> <div>➢ 所属の機関ではできないことがないと思っている。また、制度内でしか考えていない。</div> <div>➢ 所属の機関は関係ない、困っていない、〇〇が動くべきと考えている。（他人事、責任の押し付け合い）</div> <div>➢ 既にできることはやっているため、今以上できるとはなっていない。</div> <div>➢ 「支援＝制度」という固定概念の支援者が多い。</div> <div>➢ 多機関・多職種で連携・協働するメリットが感じられない。</div> <div>➢ 仕事が増えると思っている。</div>	ケース協力機関	<div>① 支援者支援会議へ参加する</div> <div>➢ 重層的支援整備事業の目的・意義を理解する。</div> <div>➢ 多機関協働事業の役割を理解する。</div> <div>➢ 専門分野以外の必要な情報を収集する。また、専門分野の情報を提供する。</div> <div>➢ グループワークを通して、他機関の支援者と対話し、お互いのことを知る。（顔の見える関係性ができる。）</div> <div>➢ ケーススタディを通じて、実際の課題への対応力を上げる。（実践的なスキルの習得・問題解決力の強化等）</div> <div>➢ 対応に困った複合的な課題を気軽に相談できる人脈を得る。</div> <div>➢ 本人同意を得られない場合でも、複合化した課題を抱える相談者に関する情報の共有等を安心して行える場（支援会議）があることを知る。</div> <div>➢ 所属機関・部署に持ち帰り、情報を共有する。</div>	<div>支援者支援会議へ参加する</div> <div>➢ 福山市全域または拠点支所単位ごと（５ブロックごと）に開催されているものに参加した。</div> <div>➢ 重層事業の目的・意義を理解した。</div> <div>➢ 多機関協働事業の役割を理解した。</div> <div>➢ 参加者同士で情報交換を行った。（支援を実施するための引き出しが増えた。）</div> <div>➢ 所属機関・部署に持ち帰り、情報を共有した。</div>	<div>知識が増える</div> <div>➢ 重層事業に関すること（多機関協働事業の役割を含む）</div> <div>➢ 専門分野以外の必要な情報（業務・制度・取組等）</div> <div>つながっていない人とつながる</div> <div>➢ 会ったことがない人たちの顔がとりあず分かるようになる。</div> <div>➢ 参加者が廊下等ですれ違う場合、挨拶する関係となる。</div> <div>困っている人・世帯がいると認識できる</div>	<div>知識が増える</div> <div>➢ 重層事業について自分の言葉で説明できる。</div> <div>➢ 実際の課題への対応力が向上する。</div> <div>➢ 自分自身の支援について一度立ち止まり、考えるきっかけとなり、支援の質が深まる。→分野外の課題で支援につながっていないか検討する人が増え、支援内容が充実する。</div> <div>お互いが共感し合える関係を構築できる</div> <div>➢ どういう考え方をする人で、どういう人となりかが分かる。</div> <div>➢ 不安な悩みを安心して気軽に共有できる。</div> <div>➢ 参加者が同じ思いを持ち、意欲的に参加する。</div> <div>安心して相談を受け止めることができる</div> <div>➢ 自分が相談できる人・場所がある。</div> <div>➢ どこに相談したら良いのか分かる。</div>	<div>支援の引き出しが増える</div> <div>➢ 支援につながるがっていない潜在的な人を早期に発見することができる。</div> <div>➢ 分野外の課題で気になる事案について、見て見ぬふりせずに相談できる。</div> <div>個別支援に関わるネットワークの形成</div> <div>➢ 信頼感を持つて一緒に仕事ができる。</div> <div>➢ 価値観を相互に尊重し共有できる。</div> <div>➢ 協働するハードルが下がり、早期な支援介入ができる。</div> <div>➢ 個別課題や地域課題を解決するために必要な役割が明確になる。</div>	支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる

課題解決ストーリー（ロジックモデル）【効果発現経路】

タイトル：福山市の重層的支援体制整備事業における多機関協働の在り方～みんなで支え合い、助け合う～

仮説	インプット	アクティビティ	アウトプット	アウトカム	インパクト	
課題仮説	誰に	どう働きかける	まずどうなって【直接の結果】	何が変わる	ありたい姿	
<div>真因【共通】</div> <div>➢ 重層事業の目的・意義の理解ができていない。</div> <div>➢ 多機関協働ステーションCOCOCALAは、困難ケースに対応するための新しい部署だと思っている人がいる。</div> <div>➢ 困難ケースに出会ったときに、どうしてよいのか分からない。（分野外のことが分からない。）</div> <div>➢ 所属する分野以外の支援者とのつながりが少ない。または、出会う機会がない。</div> <div>➢ 「支援＝制度」という固定概念。</div> <div>➢ 地域資源とのつながり（ネットワーク）がある支援者が少ない。</div> <div>➢ 地域資源を把握できていない。</div> <div>➢ 地域資源を含めて支援してきた実績がない（少ない）。</div>	<div>ケース協力機関</div>	<div>②支援会議へ参加する</div> <div>➢ 多機関協働事業者から支援会議への参加要請があれば参加する。（現在、ケースに直接関わりがなくても、今後、ケースに関わる可能性がある機関も含む。）</div> <div>➢ 参加するまでに所属機関でできそうな事の情報収集を行う。）</div> <div>➢ 支援会議でケースに関する情報（制度）を共有する。また、今後の支援の可能性を拡げるため、アイデア出しを行う。</div> <div>➢ 現状に満足せず、よりよくしようという積極的な姿勢で臨む。（他者を批判しない。）</div> <div>➢ ケースに対して、切れ目が無い支援ができるように必要に応じて情報共有を行う。</div> <div>➢ 支援会議に参加したことで、支援会議の意義・役割を理解する。</div>	<div>支援会議へ参加する</div> <div>➢ 支援が必要な人に対して、より良い支援が行えるように積極的に参加した。</div> <div>➢ 所属機関で実施できそうな支援及び今後の支援の可能性を拡げるためのアイデアを伝えた。</div> <div>➢ 所属の機関の役割を参加した機関に伝えることができた。</div> <div>➢ 支援のタイミングがきた場合に備え、情報共有を行い、支援関係機関等を知ることができた。</div> <div>➢ 多機関・多職種で連携・協働するメリット（支援者は孤独ではない事等）を知った。</div>	<div>対応すべき複合的な課題を知る</div> <div>➢ 組織内で協議・検討することで会話が増える。</div> <div>➢ 支援者のケーススタディの場となる。</div> <div>事例の課題が明確になる</div> <div>➢ 自分以外の視点・見立てを知ることができる。</div>	<div>安心して話せる場ができる</div> <div>➢ 所属機関で対応できない複合的な課題があった場合、相談できる場のひとつとなる。</div> <div>➢ 他機関への信頼と相互理解が生まれる。</div> <div>➢ 意欲的に傾聴し、協力しようという気持ちとなる。</div> <div>つながる関係者の質が変わる</div> <div>➢ ケースの投げ合いが減る。</div> <div>➢ チーム支援が可能となる。</div>	<div>包括的な相談支援に向けたネットワークの土台ができる（支援の輪が広がる）</div> <div>➢ 多機関協働事業者を挟み、会議を開催しなくても対話ができ、円滑に多機関で協働することができる。</div> <div>➢ 多機関・多職種で助け合う場が自然に生まれ、人が集まる。</div> <div>➢ 業務負担が減る。→重度化する前に把握ができる。</div> <div>➢ 会議終了後も、どうなったのか気かけ、積極的に関わろうとする気持ちとなる。（みんなで課題に向き合い続ける。）</div> <div>ケースを通して支援の引き出しが増える</div> <div>➢ お互い様（互いに助けたり助けられたり）の関係が生まれ、専門分野外の支援者と訪問等の対応で協力できることを知る。</div> <div>➢ 自分に対応に困った場合、相談できるつながりを得ることができる。（バーンアウトしない）</div> <div>支援者が孤立せず、安心してケースに「みんなで」向き合い続けることができる</div>